特定非営利活動法人
タンチョウ保護研究グループ会誌
2012 年 3 月

もくじ

タンチョウ保護研究グループの新しいページが始まります　・・・・1

第 2 回国際エコキャンプ・・・・2

エコキャンプ参加者からよせられたお声　・・・・3

国際エコキャンプ記念講演会　・・5

ねむろバードランドフェスティバル 2012 実行委員会よりご寄付をいただきました　・・・・6

タンチョウを紹介する 4 カ国語版のパンフレット発行　・・・・6

調査報告　・・・・7

活動記録　・・・・8

空き缶にくちばしがはまったタンチョウ　・・・・8

タンチョウ保護研究グループの新しいページが始まります

理事長　百瀬邦和

2012 年度はタンチョウ保護研究グループにとって二つの大きな出来事があります。一つは新しいスタッフが加わることです。タンチョウ保護研究グループの活動を継続的に円滑に進めるためには戦力の補充がどうしても必要だろうということで、３年間の人件費用にという目的寄付を匿名でいただきました。既に人選も終わっていますので、４月からはアップした戦力で活動を進められます。二つ目は環境省の環境研究総合推進費が通ったことです。このプロジェクトは「シマフクロウ・タンチョウを指標とした生物多様性保全 - 北海道とロシア極東との比較」というタイトルで、北海道大学の中村太士教授を代表としています。当会はサブテーマである「タンチョウ・シマフクロウの生息環境解析に関する研究」を担当します。このプロジェクトは３年間継続する計画で、正富欣之副理事長と、このサブテーマの代表の私とで取り組みます。また、シマフクロウ研究者の竹中健博士が当会の研究員という立場でプロジェクトに参加することになります。

同時にスタートする新しい動きを生かして法人の基礎を固めるとともに、４年目以降のさらに充実した活動に繋げられるよう努力しなくてはなりません。破格の寄付を申し出て下さった方には、会の組織を充実させ活動を活発にしていくことこそが、唯一ご好意に答えることになると思っています。

第２回国際エコキャンプ　　百瀬邦和

タンチョウ保護研究グループでは、昨年１月に続いて２回目となる国際エコキャンプを実施しました。このプロジェクトは北海道の「平成 23 年度地域づくり総合交付金（地域づくり推進事業）」から補助を受けた「タンチョウの生息する自然環境を学ぶ国際エコキャンプ事業」として行なったものです。

今年はロシアと韓国に日本も加えた３カ国からの学生が参加したキャンプとなりました。ロシアからは昨年と同じトランスバイカル師範大学から３名、韓国からは異なった大学の学生３名、そして引率の教官（代表）各１名が参加しました。日本からは昨年夏にロシアのサマーキャンプを訪れた２人に加えて総合研究大学院大学の武田君が参加しました。また講師の一人として中国ハルピンの東北林業大学からチンミン・ウー博士に来ていただきました。

キャンプは１月 23 日から２月２日までの 11 日間の日程で、タンチョウ越冬現状について釧路湿原周辺の現地視察、釧路市キナシベツ湿原に生息しているタンチョウつがいの終日追跡（自然索餌場とねぐらの確認）、キナシベツ湿原一帯における湧水および未凍結場所の確認調査と生息動物の調査、阿寒と鶴居の給餌場でタンチョウの終日カウント及びリング付き個体の滞在状況調査、釧路市立博物館等の施設見学、タンチョウの生態等や総数調査のデータ処理に関するレクチャー、地元の市民や大学関係者を交えての発表・意見交換会、講師陣による講演会を行ないました。

キャンプは学生達だけがキナシベツにあるナショナル・トラストの家で合宿し、気軽に交流できるよ

キナシベツ湿原でのフィールドワークに出発

韓国風料理がならんだキャンプでの夕食

うにしました。食事はスーパーマーケットで調達できた材料を工夫して、ロシア（風）料理の夕べ、韓国風、日本風など、それぞれ慣れない料理当番を分担しました。キナシベツ以外の活動現場へは、片道 50 ～ 60 キロメートルの距離をレンタカーを使って移動する忙しいスケジュールでしたが、朝８時から夕方５時過ぎまで休み無しの終日調査を行った鶴居と阿寒での調査日だけは現場に近いホテルに宿泊したのでゆっくり休めたと思います。

野外での調査活動はタンチョウ保護研究グループが例年この時期に行なっている、あるいは実施を予定していた活動の一部で、調査で得られた記録は貴重な資料として活用できるものです。特にタンチョウの終日カウント及びリング付き個体の滞在状況調査は、調査メンバーの一部として立派な戦力となってくれました。

現場での調査活動の後は、環境省のワイルドライフセンターをお借りして、北海道におけるタンチョウの生態や、越冬総数を把握するための終日カウント後のデータ処理方法についてレクチャーを受けていただきました。今回、実際の調査に参加したことで、北海道のタンチョウの越冬状況と調査方法とを十分に理解していただけたと思います。

キャンプ最後のスケジュールは参加した学生達の活動発表と講師陣による講演会でした。昼食を挟んで丸一日かけた会には、当会の活動サポーターをはじめ、北海道教育大学釧路校の学生や教授の方々も参加して下さいました。この会の様子については５ページの記事で紹介いたします。会場を提供していただいたシルバーシティーときわ台ヒルズには改めてこの場を借りて感謝申し上げます。

エコキャンプ参加者からよせられたお声　百瀬ゆりあ

去る１月23日から２月２日まで開催された第２回国際エコキャンプにご参加くださった学生の方々よりお声が届いていますので、そのうちいくつかをご紹介いたします。皆さんのご意見・ご感想には次の３つの柱があります。ひとつは日本や日本人に関して、ひとつはタンチョウに関して、そしてもうひとつは今回の国際エコキャンプに関してです。

日本・日本人

今回ご参加くださった学生のほとんどの方は日本、あるいは外国に初めていらっしゃいました。一日のうちに、木々が緑の東京から一面雪に覆われて銀世界の釧路へ、また、人工的に造られた環境のなかをまるで無人の車や電車や船が走り回っているような東京から自然の宝庫の釧路へ。トランスバイカル国立師範大学のセルゲイ・パクモフさんは、小さな、とはおっしゃいませんが、日本の幅のひろさにびっくりなさったそうです。

また、同じくトランスバイカル国立師範大学のウラディミール・マラコフさんは「・・・毎日が新しいことの発見と驚きとの連続でそのすべてを述べるのは不可能ですが、ひとつなんといっても確かなことは、日本の方々が非常に友好的であるということです。・・・目の奥に輝く親切心は世界中のひとを元気づけることでしょう。」と述べられています。また、「日本人の自然にたいする姿勢は、まるでお母さんが子供に対する時のようで、この自然に向けられている愛情はありとあらゆるもの、文化、芸術、自然に対しての許容、特に世界遺産ともいえるタンチョウとの関わりかたに見い出すことができ、これこそが日本人の真の豊かさであります。またこの姿勢を学ぶことが、わたくし達がこれから将来にわたり自然を守っていくうえで、必ずや助けになることでしょう。」ともおっしゃっています。

ソウル女子大学のジェヒュン・キムさんは課外活動として韓国の非武装地帯で高校生を対象の自然保護教育に携わっていらっしゃいます。彼女が一番の目標としているのは、ヒトがこの地球上でいかにして他の種と調和のとれた共存をしていくか、ということを高校生達に学んでもらうことです。今回、農業被害が決して皆無ではないにもかかわらず、北海道の農家の方々がツルにエサをやっているのを目の当たりにし、この農家の方々の心こそが、彼女が求めていた他の種との共存をめざすよい実例であると、早速授業に取り入れるそうです。

タンチョウ

タンチョウの美しさにはみなさん心を打たれたようで、トランスバイカル国立師範大学のタチアナ・カルジナさんは初めてタンチョウの家族に出会った時のことを次のように記していらっしゃいます。

「ちょっと馬鹿げているのですが、日本にいる間ずっとわたくしのなかで内なる声がしていました。それは『ああ、ずっとここに住んでいられればよいのに！』というものです。成田のホテルのまわりを歩いて竹やツバキやスミレを見た時、『なんてきれいなのでしょう。ああ、ずっとここに住んでいられればよいのに！』。釧路でふわふわの雪の吹きだまりの間を歩いていた時、『雪はなんて素敵なのでしょう。ああ、ずっとここに住んでいられればよいのに！』。キナシベツの海岸でも『ああ、ずっとここに住んでいられればよいのに！』、また鶴居の暖炉の前でも『ああ、こここそわたくしが夢見てきた所。ずっとここに住んでいられればよいのに！』。

でも、タンチョウの家族に出会った時、そして彼等がダンスを始めた時、わたくしの内なる声は全く

釧路湿原を視察

音別給餌場を視察

しませんでした。言葉は一言もおもい浮かびませんでした。今はなぜタンチョウが愛と美のシンボルと言われるのかがよくわかります。タンチョウだけが知っている家族の幸せの秘密があるのです。それだけではありません。その美しさ、優雅さ、そして皆を引き付けて止まない魅力。真白いドレスを着て真白い雪の上をゆったりと歩く姿はわたくしの心に永遠に刻まれました。」

タンチョウの美しさにだけではなく、その現実にも学生方の目はとどきました。前出のキムさんは韓国のパジュをフィールドとしてツル類の調査研究をなさっていますが、北海道の冬期給餌場に集まるタンチョウのあまりの数の多さ、またそのヒトとの距離の近さに、おもわずタンチョウが希少種であるということを忘れる程ショックをうけました。そして「もっと悪いことに、一日の観察の終り頃にはタンチョウがあたかも家禽のごとくにおもえてきました。」と述べられています。

国際エコキャンプ

パクモフさんが「釧路での 10 日間には 2 ヶ月分のスケジュールがつまっていた。」、と述べられているように、今回の国際エコキャンプも前回に引き続き盛り沢山でした。

初日の釧路市長表敬訪問や歓迎会にはじまり、釧路市立博物館、釧路市動物園、ワイルドライフセンターの施設見学、釧路湿原周辺のエキスカーション；キナシベツ湿原における野外終日調査、釧路市阿寒町及び鶴居村における総数調査・標識確認調査；タンチョウの生態等や総数調査のデータ処理に関するレクチャー、講師陣による講演会、地元の大学教授や大学生を交えての発表・意見交換会、そして市民との交流会、と自由時間はほとんどありませんでした。

総合研究大学院大学の武田浩平さんは、言語も文化も背景も各々異なる参加者達が、「自然」という共通の興味のもとに集まったということが大変意義があると述べられています。そしてこの「共通の興味」のお陰で、はじめは難しかった意志の疎通も比較的スムーズに進んだのでは、と感じられたそうです。

今回も共通言語はどの参加者にとっても外国語である英語でした。梨花女子大学のタミ・チェンさんは「英語での会話能力が充分でなかったために意志の疎通が思ったようにできなくて残念でした。」と述べられていますし、武田さんは意志伝達の手段としての英語の重要性を痛感なさり、これを機会に、英語の会話能力を真剣に身につけようと決心なさったそうです。

寝食を共にすることにより参加者内でより密なコミュニケーションをとることができ、また、普段はなかなか接することができない各々の分野の最前線で活躍する講師陣から直に様々なお話を伺うことができたよい機会であったようです。ソウル大学大学院のソンファ・ユーさんはこの国際エコキャンプで得られた交流を深め、韓国におけるツルの保護・研究に役立てたい、と早速、標識調査の協力をタンチョウ保護研究グループに打診くださいました。

キムさんも国際エコキャンプをとおしてタンチョウ保護研究グループの調査に参加することができ、沢山の新しいことを学び、基礎知識をたかめることができ、「わたくしにとり本当に有益な経験であった」、と述べられています。

参加者のみなさんが国際エコキャンプの存続が望ましいとお考えですが、武田さんからはプログラムに関して具体的なご提案がありました。今までの野外活動はまえもってタンチョウ保護研究グループが事前にお膳立てをしてきました。武田さんはその野外活動の一部を計画段階から学生達にまかせてみてはどうかというものです。前向きなうれしいご提案です。このようにして、国際エコキャンプの実際の運営にどんどん参加者のご意見が反映されていき、みなさんの身近なものに成長していくことができればよろしいですね。

国際エコキャンプ記念講演会　井上雅子

２月１日に、上記講演会をシルバーシティときわ台ヒルズで行ないました。午前中は北海道教育大学釧路校から神田教授と生方教授のご参加をいただいて学生たちの発表会を、午後からは講師陣による一般向け講演会でした。

学生たちの発表は、各自がこれまでどんな調査をやってきたのかという報告で、ロシアからは２題の発表があり、どちらもダウルスキー保護区で行なった調査結果でした。

ウラディミールさんとセルゲイさんは、この保護区にあるトーリー湖岸環境がレクリエーションによってどのような影響を受けているかを調べるため、4 地区の 35 か所（100m × 100 m）で、ごみの量と焚火跡の数と大きさ、植生状態などから環境影響評価を行ないました。前年よりもごみの量は半減していて、4 地区のうち設備のある 1 か所がほぼ良好と評価されました。

タチアナさんは、トーリー湖の塩生湿地に生育する植物に注目し、環境による成長度合いを調べました。5 か所に 10 m× 10 mの方形区を設け、各区画における被度、高さ、太さなどから、この植物の成長が周囲の植物や気温に依存していることがわかりました。

韓国からも２題の報告がありました。キムさんからは韓国で越冬するタンチョウの飛来地の一つパジュで飛来数が減り続けていること、これはこの地域で開発が進み、都市化やグリーンハウス（ビニールハウス）が広がったことによるもので、飛来数は一ケタにまで落ちているそうです。

ユーさんからは、韓国最大のタンチョウ飛来地、チョロンの報告でした。国境（非武装地帯）に設置された高さ５mほどの柵のさらに上の有刺鉄線へ衝突することで、毎年 20 羽ほどがけがをしたり死亡したりしているということでした。

日本からは武田さんが、これから研究しようとしているタンチョウの求愛行動の解析について、他の動物を例に引きながら、その方法や意味づけについて考えていることを話されました。

このほか、タチアナさんとタミさんが、今回のエコキャンプの印象を画像を交えながら楽しそうに報告してくださいました。

午後からの講演会では、学生を引率して来られたロシアのタチアナ・ティカチューク博士とキーサップ・リー博士、また中国からチンミン・ウー博士、当グループから正富欣之博士に話をしていただきました。

ティカチューク博士は「ロシアにおけるサマーキャンプ」と題して、初めにダウルスキー自然保護区の説明があり、ロシア・モンゴル・中国の国境にまたがる国際的に保護されている湿地の一部であること、25 ～ 40 年という周期で湖が干上がって大量の魚が湖岸に打ち上げられたり、水位が下がってヨシ原が広がる全く異なる景観を見せてくださいました。そしてこの保護区で 2000 年から大学のカリキュラムの一環として行われているサマーキャンプについて、電気も水道もないキャビンの中で自炊しながら行っている様子が紹介されました。エコシステムの学習と学生のトレーニングを兼ねて、一つのテーマを同じ場所で何年間も継続調査できるので、保護区と学生との双方にメリットがあるそうです。

リー博士は「韓国のツル」と題して、2008 年から始まった国内 14 か所でのツルの飛来数把握について、現在タンチョウが約 1,000 羽（主要 4 地点の合計）、マナヅルが 1,500~3,000 羽（同 5 地点）、ナベヅルが 300 ～ 400 羽（南部 3 地点）であること、タンチョウがチョロンで増えているのは、越冬が見られなくなった北朝鮮や、韓国内の他地域でダムや開発工事が進んだためにチョロンに集中した結果と考えられること、また、韓国のタンチョウの幼鳥比率はほぼ 20%であるのに飛来数はふえていない

学生の発表について活発な討論も交わされました

こと、非武装地帯はねぐらとしてはよいが餌はないなどのお話がありました。

ウー博士は「タンチョウはどんな環境を好むか」と題して、黒竜江省ザーロン保護区で 2002~2008 年に行ったタンチョウの営巣地についての研究報告でした。21 万 ha という広さを持つこの保護区の 80~90%はヨシ原ですが、1997 年以来、干ばつや野火、水位変動などにより環境が大きく変化したため、タンチョウが繁殖期にどのような環境を好むのかを調べた結果、縄張りサイズは小さくなっているが、2002 年以降、ヨシ原を維持するための給水が始まり、環境指標はよくなっているというお話でした。

正富欣之博士は「北海道のタンチョウはどのような環境で営巣しているか？」と題して、20 世紀前半以降に道内の湿地面積の 60%が失われた中で、タンチョウの営巣環境がどう変わったかを知るため、現在の営巣地点を植生図に落としてみたところ、新たな営巣地はヨシ原で減少し、牧草地や畑地など乾燥した場所で増加していること、営巣地が人間の活動域とオーバーラップし、道東以外には湿地が残っていないことなどから、これからは越冬地の集中化を避け、できるだけ湿地を保存していくことが必要とのことでした。

世界的にも湿地環境はどんどん減少しています。グローバルな視点で見て行くことの必要性を改めて感じた講演会でした。

ねむろバードランドフェスティバル 2012 実行委員会よりご寄付をいただきました

ねむろバードランドフェスティバルはバードウォッチングを主体とした観光振興を図るために根室市と根室観光協会が主催となり開催しています。その開催目的のひとつに「稀少鳥類保護基金造成」をあげており、対象の鳥を決めて募金を集め、関係機関に寄付しています。今年はタンチョウが対象となり、基金の寄贈先として当会が選ばれました。

実行委員会では今年 1 月 17 日～2 月 29 日まで市内の協力店に募金箱を設置し、また 2 月 4 日から 5 日にかけて行なわれた「ねむろバードソン」の参加 9 チームよりの募金を集めました（バードソンとはバードウォッチングをしながら募金を集めるチャリティイベントです）。

3 月 7 日に根室市観光インフォメーションセンターで行なわれた贈呈式で、実行委員会の中林直委員長より基金 53,941 円をいただきました。当会ではタンチョウ保護のための調査研究に、この基金を役立てる予定です。募金していただいた皆さまとねむろバードランドフェスティバル 2012 実行委員会に深く感謝いたします。

タンチョウを紹介する４カ国語版のパンフレット　～国際タンチョウネットワークが作製～

タンチョウ保護研究グループのミッションのひとつに国際タンチョウネットワーク（International Red-crowned Crane Network, IRCN）の支援があります。その支援を受けて、IRCN はこの度、タンチョウを紹介するパンフレットをロシア語、中国語、韓国語、そして日本語で発行しました。

タンチョウはロシア、中国、コリア、そして日本、と広範囲にわたり生息しています。日本では考えられませんが、大陸ではタンチョウと聞いてもその姿形を思い浮かべることができない人達が沢山いらっしゃいます。そこで 1 人でも多くの方にタンチョウのことを知って頂こうと、このたびのパンフレット作成のはこびになりました。ご興味をお持ちのかたは事務局までご連絡ください。無料配付（送料自己負担）しています。

左下から時計回りに日本、韓国、中国、ロシア語版

調 査 活 動 報 告

冬期タンチョウ総数調査

タンチョウの現存数を知るために継続して行っている冬期タンチョウ総数調査を1月28日から2月6日にかけて実施しました。28・29日は鶴居村、30・31日は阿寒町、2月2日は釧路川流域、3日は中茶安別、4日は十勝地方、5日は音別町で終日調査をおこないました。2月6日にはその他の少数越冬地を分担して調査しました。調査結果は現在、集計中ですが、今年は幼鳥が多く確認されており、総数も増加するのではないかと予想しています。

なお、北海道のタンチョウ生息状況一斉調査（1月25日実施）では1,143羽が確認されていますが、これは、実数よりもかなり少ないと見られています。総数を知る調査は、タンチョウ保全のための基礎となる重要な調査です。現在、今後の調査の方向について、北海道と協議しています。

調査はのべ172名のボランティアの方のご協力でおこなわれました。前述しましたように国際エコキャンプに参加した海外の研究者たちも調査に加わり、国際色豊かな調査となりました。寒い中、ご協力いただいた皆さまに、改めて感謝いたします。

調査開始前の打ち合わせ

中標津における越冬環境調査

厳冬期に俵橋湿原のニオを利用しているタンチョウの行動範囲とその環境を調べるため、2月10日の8時30分から17時30分まで終日の調査を行いました。調査には当会からと中標津の自然を知ろう会から総勢6名が参加しました。防風林を挟んだ道路脇に高さ24メートルの高所作業車を立てて交代で上り、ニオを監視するとともに、飛来するツルがどのように動くのか観察しました。別の班は、ねぐらと予想されている標津川の堤防にスノーシューで入って、堤防や林の影になる所を監視しました。

監視に用いた高所作業車

給餌場にはつがいと思われる2羽が二度訪れてニオの中のトウモロコシを食べましたが、追跡の結果ではこの2つがいは別のつがいであることが確認できました。この2つがいは日没後に、橋を挟んで上流と下流に分かれてねぐら入りしました。また、堤防上の班はニオから一番近い牧場の敷地内で、片方のつがいと別の1羽が一緒にいるのを見ていることから、ニオには2つがいに加えて単独のツルも来ている可能性があります。

高所作業車からの風景（右上の写真を含め山宮克彦氏提供）

調査後に大雪が降ったため心配して二オを見に行かれた中標津の大河原さんからは、ニオについていた足跡が1羽のようだったという報告を下さいましたので、やはり単独のツルもニオに来ている可能性が高いと思います。

＜活動記録＞（2011 年 12 月～ 2012 年 3 月）

11 月 28 日～ 12 月 2 日
国際タンチョウネットワーク・カウンシル会議に参加（中国塩城市）
12 月 6 日　運営会員連絡会（10 名出席）
12 月 9 日　会誌「Tancho14 号」発送
1 月 11 日　運営会員連絡会（7 名出席）
1 月 15 日　総数調査学習会
（於：釧路市民活動センターわっと）
1 月 22 日～ 2 月 13 日
チンミン・ウー博士（東北林業大学・中国）来釧
1 月 23 日～ 2 月 2 日
第 2 回国際エコキャンプ
1 月 28 日～ 2 月 6 日
タンチョウ総数調査
2 月 1 日　国際エコキャンプ勉強会と記念講演会
（於：シルバーシティーときわ台ヒルズ）
2 月 12 日　講演会「中国黒龍江省ザーロンのタンチョウと自然（講演者：ウー博士）」
（於：釧路市立博物館：博物館と共催）
2 月 10 日　中標津俵橋湿原にてタンチョウの終日観察
2 月 15 日　運営会員連絡会（6 名出席）
2 月 20 日～ 27 日
韓国ヨンチョンでのタンチョウ捕獲調査に協力
3 月 2 日　運営会員連絡会（9 名出席）
3 月 7 日　ねむろバードランドフェスティバル 2012 実行委員会からの寄付を受ける
3 月 16 日　北海道新聞、環境省のヘリコプターによる釧路湿原のシカとタンチョウの調査に協力
3 月 20 日　タンチョウ総数調査の結果について班長打合せ会

コラム

空き缶にくちばしがはまったタンチョウ

全国ニュースにも取り上げられましたが、1 月下旬に鶴居村でくちばしが空き缶に刺さり、抜けなくなったタンチョウが見つかりました。このタンチョウには「143」と記された黄色い脚環がついていました。ヒナの時に保護され、動物園で飼育された後、2011 年 1 月に野外へ放鳥されたツルだったのです。放鳥後は鶴居村で生息していることが確認されていました。

釧路市動物園の職員や環境省、野鳥の会のレンジャーの方々が観察し、捕獲等も試みられましたが、うまくいかず、2 月 25 日以降は姿が見られなくなってしまいました。

くちばしにものが挟まるという事故は以前から確認されています（Tancho11 号の「標識物語第 10 話」をご覧ください）。タンチョウはいろいろなものを突く習性があります。また、不注意やマナーの悪い行為が野生生物の生存に影響を与えることは他にもあります。このような不幸な事故が防げるように、私たちも取り組んでいきたいと思います。

写真提供：（公財）日本野鳥の会

＜会員（3 月末現在）＞
運営会員：25 名、個人サポート会員：137 名、団体会員：12 団体

Tancho Protection Group (TPG) newsletter　TANCHO
Fifteenth issue　March 2012

＜表紙写真＞
第 2 回国際エコキャンプの参加者たち
キナシベツ・ナショナル・トラストの家の前にて
（韓国から参加のソンファ・ユー氏提供）

特定非営利活動法人
タンチョウ保護研究グループ
（編集：松本文雄）
〒 085-0036
北海道釧路市若竹町 10 番 2 号
Tel/Fax 0154-22-1993
e-mail: tancho1213@pop6.marimo.or.jp
URL: http://www6.marimo.or.jp/tancho1213